

歴史探訪

其の180
History Inquiry Club

文化財課 ☎ 22-1720
(博物館) FAX 22-2028

「岬の神性」

昔の人々には共有されていた感覚や自然観が、環境や生活様式の変化によって、後世に引き継がれないことがあります。

その例として「岬」に対する感覚があります。本市にも「伊良湖岬」として存在しますが、「岬」と呼ばれる地形に昔の人々は神性を感じていました。そのことは、単に陸地の先が海へ突き出ている地形であれば、「さき」と呼べばよいものを、

●昭和40年ごろの伊良湖岬



神を意味する「み」という接頭語をつけていることから分かります。しかし、現代人にとって、昔の人々がなぜ、この「岬」と呼ばれる地形を神として崇めたのか、その感覚は理解し難いものとなっています。

ひよんなことから、筆者はその神性を感じたことがあります。1年ほど前、木製のカヌーを自作し、縄文人気分で三河湾内を漕いでいたときです。施工不良のためか、突然カヌーが壊れ、霧で陸地がかすかに見える程度の沖合で漂流したことがあ

ります。「板子一枚下は地獄」その言葉どおり、頼りとする船を失い、海に取り残され、どうにかして陸地にたどりつかなければ命に危険が及ぶ状況に陥りました。そんなとき、視界に現れる陸地の影は自分にとって唯一の救いの神のように見えたものです。身に着けていたものを捨て、ライフジャケットを頼りに陸地にたどり着いたときは、地面のありがたさを実感しました。

この体験は極端な例ですが、正確な海図やコンパス、GPSなどが普及する以前は、漁を生業に生活する人々は、「山アテ」と呼ばれる測地航法で自分の位置を推測し、漁場の把握をしていました。旧田原町の表

浜の漁師は、蔵王山、衣笠山、藤尾山の三つの山を「山アテ」に利用し「三つコブ」と呼んで、目印にしていたようです。海で生きる人々にとって、海上から見える特徴的な地形は、魚のよく獲れる位置を記憶し、自身がいる

位置を推測するための命綱であったのです。

その中でも岬は、外海へ漕ぎ出した船が遠方からでも捉えることのできる最後の地形であり、特に重視されていました。岬すら見ることできかない「山ナシ」の海は測地航法を基本としていた昔の船乗りにとって、死と隣り合わせの未知の世界でした。そういう意味で、遠くからでも見ることでできる陸地を神として崇めたのでしよう。

夏休みは、海のレジャーに親しむことも多いと思います。海難事故に遭遇し、「岬の神性」を実感することのないように安全対策に気をつけたいものです。(山本)



●昭和20年表浜の漁師たち(鈴木政一氏撮影)